

地理の導入学習の授業実践

青森県立青森高等学校 三浦 真

1. はじめに

現在、中学校学習指導要領の内容の「国々の構成と地域区分」において、「現代の世界は、州や大陸及びそれらを幾つかに区分した地域でとらえられていることや様々な国々から構成されていることを理解させ、主な国々の名称と位置を地図を用いて身に付けさせるとともに、地名や地図への関心を高める。」(下線筆者、以下同)とある。しかしながら、入学してきた生徒の知識は定着されておらず、高校において新たに学ぶ必要性に迫られている。

また、高校の学習指導要領において、地理Aの目標は「現代世界の地理的な諸課題を地域性を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」であり、地理Aと地理Bとの違いは下線部で示した「現代世界の地理的事象を系統地理的、地誌的に考察し～」の部分のみである。世界史A・日本史Aにおいては「近現代史を中心とする～」と履修範囲を限定しているのに対して、抽象的な表現にとどめている。

本校では、2年次に地理A、3年次に地理Bと継続履修する生徒が、センター試験をはじめとする大学受験に臨んでいく。これにより、年間学習指導を計画する際に、われわれ高校の地理担当者は、地理Aと地理Bの差異については、指導方法及び進める順番(進度)の熟慮が必要である。

ここでは、『新地理A(初訂版)』(以下、教科書)と『新詳地理資料 COMPLETE 2008』(以下、資料集)を使って、興味づけから知識定着へ繋げるための導入時の授業展開を考えてみたい。

2. 1年のはじめの授業(導入)に教科書を概観する

教科書の目次p.2～3を概観し、今後学ぶ内容・

項目についての説明を行う。最初に学ぶ単元である「1部1章 球面上の世界と地域構成」の内容は中学校までの地理分野や理科の地学分野である程度履修しているはずであるが、ここ数年の生徒を見ているとまったく理解できていないことに驚くこともある。そこで、はじめから1章に入るのではなく、生徒の興味・関心を引き出す工夫の一つとして、教科書巻頭の口絵(世界を旅して)の写真を使っていくことにする。

地理の面白さの一つは映像や写真を見て、そこに映し出されていることに興味や疑問を持つことである。毎回の授業でDVDやVTRの準備をすることは、時間的にも教室の環境にも制約があるので、教科書や資料集の視覚的教材を使うことは有効な手段である。教科書の口絵のなかからいくつかをピックアップして、教師が質問(以下、Q)を出し、生徒の反応(以下、A)を見ながら進めていく。その際は、あくまでも1年間の導入部分であることから、内容については深入りせず、これから学ぶことへの興味づけ程度に抑える。

口絵1 東アジア～中国～→「⑤多彩な上海料理」

Q:「中華料理と言って思い出す料理は?」

A:「麻婆豆腐!」

Q:「写真に写っていますか?」

→まとめ:中国では地域によって食材も違い味付けも違うことを伝えて、食文化を学ぶことも地理の授業であることを伝える。



図1 『新地理A(初訂版)』口絵1⑤

口絵5 サハラ以南のアフリカ→「①サファリツアー（ケニア）」

Q:「ライオンは草に隠れていますね? この草原はどうして草がいっぱいなのでしょう?」

A:「アフリカだからでしょう!」

→まとめ:動物が隠れられる丈の長い草原がどのような気候でできるのかを学ぶことも伝える。



図2 『新地理A (初訂版)』口絵5①

口絵10 東アジア～韓国～「④チマチョゴリを着た女性」

Q:「隣の国なのに服装が変わっていますね。後ろに写っている家屋に気づいた?」

A:「障子のようなドア!」

→まとめ:下のほうに穴が開いていることから、オンドルについて話し、日本との気候の違いを学ぶことを伝える。



図3 『新地理A (初訂版)』口絵10④

3. 国名等の知識の定着をはかる

口絵の写真のような地域性を踏まえて学習することが多くなるので、地域名や国名をある程度知っておくことも必要となる。今年1年間、授業の初めの5分間程度、国名などを答える小テストを

毎時間行っていくことを伝える。

①東南アジアやラテンアメリカ、アフリカなど各地域を1枚のプリントにして10回程度行う。

②各地域の初回には30～40の国名・地名などに番号をつけたプリントを配布し、各自で調べて模範解答を作成させておく。その際に『新詳高等地図(初訂版)』(以下、地図帳)を使って調べるのだが、あえてどのページかは指示せずに、生徒自身が地図帳を調べる力を身につけるように配慮する。

③2回目からは、同じ地域から毎回アットランダムに選んだ番号(15ほど)をつけたプリントに答えさせる。終わった生徒は模範解答を見て各自で○つけを行う。

④裏面には新聞・書籍からコピーした地理の雑学を印刷しておき、早めに終わった生徒はそれを目を通す。

この小テストでは、生徒が授業前に無理に暗記してきて高得点を取ろうするのではなく、何度も見ていくうちに自然に覚えるような配慮をしていく(プリント例を参照)。

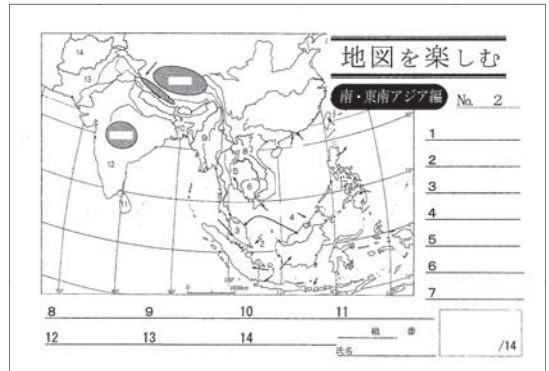


図4 プリント例(小テスト 南・東南アジア編)



図5 プリント例(雑学)

4. 球面上の世界と地域構成の導入として

教科書の「1部1章 球面上の世界と地域構成」の内容では、水陸分布・経度・緯度・時差・地図の種類・図法と進んでいく。しかし、現在の数理的な知識の習得の前に「人々は地球（世界）というものをどのようにとらえてきたのだろうか？」という疑問を持たせることが必要だと考える。

そこで、資料集の補章（p.222～223参照）を使いながら、世界像の変遷と高校生の認識とを比較しながら学ぶ。ここでは、その当時の世界観・地理的な認識がどの範囲まで及んでいたのか。そしてどのような背景があるのかを歴史年代や地域ごとに概観できるようにする程度にとどめ、より詳しい内容については図法など後で学ぶ授業で補足していく。

①古代の世界像◇1：バビロニアの世界図では、B.C.700頃に作成され、紙ではなく粘土板に描かれていたために現存していることがわかる。また、大地はバビロン中心の円盤のような形で大海の上に浮かんでいると考えられた。◇2：エラトステネスの測定では、地球が球体であることを知っていたことがわかる。また、B.C.200頃に地球の円周を計算したことの偉大さを実感する。◇3：プトレマイオスの世界図では、A.D.150頃にはすでに経線や緯線といったものが考えられていたことを知る。

②中世の世界像◇1：T Oマップでは、キリスト教の勢力が強大となり、精神の世界とともに知識の世界にも君臨したことがわかる。古代科学は否定され、世界観は聖書に由来するものになり、地図も宗教的な絵図となった。◇3：イドリーシーの世界図では、ギリシャ・ローマ時代の世界観が継承されたのはイスラーム社会であったことを知る。

③近・現代の世界像◇1：マルティン＝ベハイムの地球儀では、最初の地球儀を写真で確認できる。◇2：図法として学ぶメルカトルの世界図は1569年に考案されたものであり、未確認の大陸も残っていたことを知る。

④日本人の世界像◇1（プリントを用意）：行基図では奈良時代にもこのような日本地図があったことを知る。◇2：伊能図では、江戸時代の鎖国のなかでも日本全土を測量し、正確な地図がつくられていたこと理解する。



図6『新詳地理資料 COMPLETE 2008』p.223④

5. おわりに

今回の授業のねらいは、地理Aを学びながら地理Bへのステップとなることを意識して計画を立てることである。2年次に地理Aを履修しながらも、3年生ではセンター試験を地理Bで受験しなければならないからである。地理Aは地理Bよりも少ない限られた授業時数のなかで実施される。そのため地理用語を列举し、知識を覚えこむという時間的な余裕はない。よって、興味・関心を持たせながら自分で調べ学ぶ姿勢を育てていくような授業を展開することが必要である。しかしながら、地理Aの教科書をそのまま順序通りに進めた場合、知識が断片的になり、ある特定の地域に偏ってしまう可能性が高い。そのような地理Aの特色を理解し、教科書の「口絵」や「技能と発展のコーナー」、資料集の「補章」を単元の導入で使うことで、より総合的な学問としての地理を学ぶことができるのではないだろうか。